



2015(平成27)年  
7月24日発行

Vol.63

# ELCO RADAR

Ecological Life and Culture Organization

公益社団法人 環境生活文化機構 季刊エルコレダー



## CONTENTS

**TOP**

第19回環境文化講演会 基調講演  
“地球目線”で持続可能な未来を考える—『<sup>さわ</sup>触れる地球』を使って  
京都造形芸術大学教授 竹村 真一氏 ..... 1

- 《特別連載》 エシカル・プラネット2  
ファッションジャーナリスト 生駒 芳子氏 ..... 7
- 《連載》 環境を見つめる人々46 立教大学大学院 教授 萩原 なつ子氏 ..... 10
- 《連載》 エコ&ユニフォーム最前線14 ダイセン株式会社 記者 富永 周也氏 ..... 11
- 《報告》 平成26年度リサイクルマーク事業ユニフォームリサイクルシステム実施状況 ... 12
- 《報告》 平成24~26年度地球環境基金助成活動 ..... 13

# “地球目線”で 持続可能な未来を 考える

—『<sup>さわ</sup>触れる地球』を使って—

京都造形芸術大学教授 竹村 真一氏



アフリカで最初のヒトが誕生し、やがてユーラシア大陸を経由してアメリカ大陸の最南端にまで、およそ6万年かけて人類は到達した。このグレートジャーニーを現代の私たちは一生の中で追体験できるようになった。こんな画期的な時代にふさわしい新たな情報環境を提供するツールがある。地球の大きさや丸さ、美しさ、世界の自然や文化の多様性をリアルに実感できるデジタル地球儀「触れる地球」を使って、竹村教授にグローバルな地球目線でお話いただいた。

(2015年6月24日 航空会館にて)

### 世界初のデジタル地球儀の誕生

私の専門はもともと文化人類学です。若い頃には世界中をまわってフィールドワークをしてきました。アマゾンやチベットなども含めて70カ所ほどになります。その研究成果を紹介するには地図の活用が欠かせません。現在もっとも普及している地図は、経線が平行に引かれているメルカトル図法の地図です。16世紀後半のヨーロッパ、日本では織田信長の時代に考案され、この21世紀にまだまだ一般的な地図として使われています。ところが、この地図は極地に近づくほど経線の間隔がより広くなってしまふ欠点があります。

このIT時代に、地球のリアルな姿を実感できる地球儀が作れないはずはありません。それなのになぜ誰も作らないのだらうという素朴な疑問がありました。なによりも私自身がこうした地球儀を必要としていました。そこで様々な専門家の方々に声をかけてチームを組織して、10年来開発を続けてきました。最初の発想段階からすると15年ほどになります。2005年にはプロトタイプができ、愛・地

球博で発表しました。以来、洞爺湖サミット、ダボス会議などでも紹介させていただいています。

ハードの面ではIT技術者やエンジニア、デザイナーといった多くの専門家に協力してもらいました。4Kのプロジェクターで映し出される表面はアクリル製で、このように水の滴るような地球の美しさが表現できるアクリルドームの開発には大変な試行錯誤がありました。この完成には日プラという会社の敷山哲洋しきやまてつひろ社長の力に負うところが大きいです。

ソフトの面では、表示されるデータは海洋研究開発機構、地球シミュレーションセンター、JAXA、ウェザーニューズ、国立環境研究所など本当にオールジャパン、それぞれの分野のトップクラスの機関の協力を得ました。

このデジタル地球儀を日本、そして世界の学校教育現場に普及させていきたいと願っています。同時に日本の政治家やビジネスリーダーの方々にこそ有益だと思えます。なぜならば、今ほど地球目線で考えることが必要な時代はないからです。

## リアルな地球を実感する

それでは、実際にこのデジタル地球儀を回しながらご紹介します。表示されるのは半球ですが、インタラクティブなもので、地球儀の表面に触れてぐるぐる回せば簡単に地球の裏側も見られます。しかも、地球の諸情報をリアルタイムで表示できます。例えば虫眼鏡ターゲットという機能を使えば、世界のいろいろな町のいま現在の様子が映し出されます。今や世界中の街角に、ウェブカムというインターネットにつながったカメラが設置されていて、ほぼリアルタイムでその画像を流すことができます。

次にご覧いただくのは、いま現在、午後4時頃の地球の姿です。明るくなっている地区と暗くなっている地区があります。暗くなっている地区は夜です。地球儀を回して日本をみると、夜の帳が迫ってくるまでにはまだ数時間あることがわかります。さらに回してみるとアフリカのセネガルのあたりがちょうど朝を迎えています。北の方を見ますと、朝になってまだ数時間のところにロンドンやダブリン、さらに高緯度にはフィヨルドの町も見えます。すべていま現在の姿です。高緯度といっても実際の地球には緯度も経度もありません。国境もありません。そこでデジタル地球儀では緯線や経線、国境など、必要な情報を自在に加えて表示できます。

次に北極の氷を見てみます。数日遅れではありますが常に最新のデータが送られてきますので、ここに表示されているのは準リアルタイムの北極です。そこにタイムスケールという機能を使うと過去の様子、例えば昨年から今年までの氷の状態の変化が見てとれます。このようにリアルな地球の変化として誰にでも実感できることが重要で、そうでない限り一部の研究者のための研究データで終わってしまいます。

## 地球目線でないと理解できない

次に気象情報を見てみましょう。デジタル地球儀には雲の動きが示されています。この情報は30分ごとに更新され、細かい解像度で梅雨前線に沿った雲の流れをたどるとインドからずっとつながってきているのがわかります。これは日本の梅雨の典型的な様子です。東大の沖大幹教授らの研究によれば、梅雨時の日本に降る雨の10粒のうち1粒はインド洋から、4粒くらいは南シナ海から運ばれてきているそうです。

こういう話も聞くだけでは「ああ、そうなんだ」で終わってしまいますが、このデジタル地球儀で実際に「見える化」してみると、本当に日本の雨がはるか遠くのインド洋あたりからはるばる運ばれてきているのが感じられます。このように宇宙から実際にズームインした地球目線で見ることによって、梅雨というのは地球大の水循環のローカルな表れにすぎないことがわかってきます。日本の天候を理解するにはこういう地球的な視野が必要なのです。

次は東日本大震災の時の津波が広がっていく様子を見てみましょう（写真1）。このデータは東北大学で3.11の研究最前線に立たれている今村文彦教授から提供いただいたものです。波が太平洋をゆっくり広がっていくように見えますけど、実際には時速700kmくらいのスピードになります。これはジェット機より速い。半日くらいでハワイに到達し、1日以内で対岸のチリにまで到達するのがわかります。

ちなみに、日本とチリがどのくらい離れているか

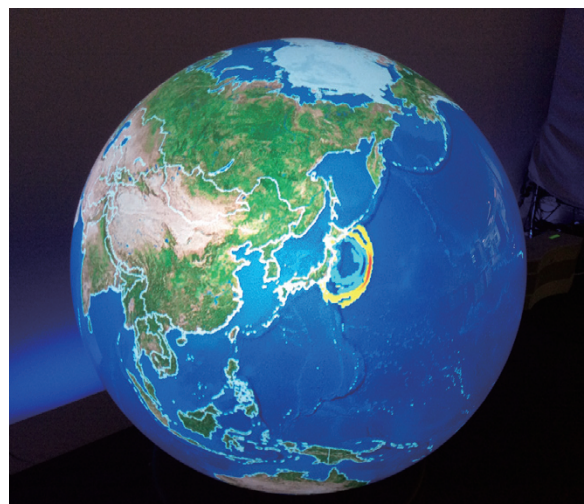


写真1 東日本大震災で発生した津波が時速約700kmで太平洋上を伝わっていく様子

触れる地球：竹村教授が開発した世界初のデジタル地球儀。実際に触って操作し、気象情報をはじめ様々な地球の姿を映し出せる。

## 地球は生きている

実は地球は生きているのです。プレートテクトニクスによる地表面の新陳代謝、実際にこのように大陸が生き物のように動いています。同時にそれが火山活動に大きく関わっています。

日本列島は複数の大きなプレートの境界上にあります。太平洋プレート、フィリピン海プレート、北米プレート、ユーラシアプレートの4つです。日本列島の成り立ちを理解するためには、この4つのプレートの説明だけでは不十分です。まずは地球の裏側から知らなければなりません。

そこには大西洋があり、その中央に「大西洋中央海嶺」という海底火山が南北に連なっています。ここは深海での熱水の噴出や、その恵みによる太古の生物群が発見されたことなどで話題にもなりました。つまり、ここはプレートの湧き出し口なのです。

アフリカの西岸と南米の東岸を見比べてください。海岸の形がちょうど重なります。これは2つの大陸がもともと1つで、大西洋中央海嶺を境にだんだん離れてきたことを示しています。この大陸移動説は、ウェーゲナーが100年ほど前に提唱しましたが、発表当時は一笑に付されました。1980年くらいに「プレートテクトニクス理論」が確立されて、今ではほぼ実証されています。

このプレートの動きを地球儀で見してみましょう。約6億年にわたる変化を早回しで見ると、約2億年前にパンゲアと呼ばれる1つの超大陸が、現在の大西洋の赤道あたりにできます。さらに続けると、パンゲアが南北に分裂し、 Gondwana という南側の大陸がまた東西に分裂して現在の南米とアフリカになっていきます。この地球儀では、このように数億年スケールで地球の歴史を再現して見ることが出来ます。不動の大地も動いていることが実感できます。

これに地震や火山活動のデータを重ねると、先ほどの大西洋中央海嶺というのがプレートの湧き出し口で、ここからだんだんプレートが分離していったのがわかります。ここからアフリカと南米に分かれただけではなく、北の方を見るとヨーロッパ大陸と北米大陸とも離れていっています。この離れていくプレートの湧き出し口である海底火山をたどっていくと、1カ所だけ陸上に現れています。これがアイスランドです。

アイスランドには、年間約4cmずつ開いているギャ

という、地球儀を回して日本が半球の端っこにきたところですよやく反対側にチリが見えてきました。つまり半球ほぼ全部が太平洋なのですね。その広さが実感できます。この感覚はメルカトル図法の地図で見ても実感できません。

私は小学校の子どもたちには、地球のことを「地球」と言わずに「水球」と呼びましょと言っています。それは太平洋の広さのためだけではなく、水がこれだけあるおかげで寒暖のバッファーになっているからです。太陽からの距離が同じくらいの月と比べるとよくわかります。月は太陽光が当たる側がプラス100℃以上で、陰の側はマイナス150℃以下になります。一方、地球は熱容量の大きい水で覆われているため、昼夜の寒暖の差もあまりなく、平均気温が15℃くらいに保たれています。実によくできていますね。

近年、環境問題として負の面を強調する傾向があります。それは確かに我々が取り組むべき課題です。しかし、21世紀の今に生まれてきた子どもたちに地球の素晴らしさを教える前に、地球ってどれだけ大変なことになっているのかネガティブ情報を教えるばかりでは夢も持てません。

大人の責務として、私たちはこんな素晴らしい星に生まれてきたのだ、水に祝福された水球と呼ぶべき星は宇宙広しといえどなかなかないのだと伝えていかなくてははいけません。そういう意味で、私は人類の宇宙探査の最大の発見は、「地球の発見」だと思えます。系外惑星もたくさん発見されていますが、宇宙を探査すればするほど、地球の有り難さ、レアさを感じていく。そんな星に私たちは生を享け、ある意味では宇宙を代表して稀有な進化の実験をしている。そして、こんな宇宙目線の認識をもてた初めての人類の世代として、地球に新しい眼差しを注ごう。そういう願いでこの地球儀を作っています。



オという大地の裂け目のような地形があります。これは北米大陸とユーラシア大陸が離れていっているためにできたのです。

しかし、地球は有限ですので、押しやられたプレートの先は、地球の裏側で出合うわけです。それがちょうど日本になります。

アイスランドで別れた2つの大陸プレートのうち北米プレートに乗っているのが大まかにいうと北海道・東北・関東になります。逆のユーラシアプレートに乗っているのが南アルプスから西日本全体になります。この2つのプレートが出合うところが、日本列島を南北に二分するフォッサマグナ（大地溝帯）、つまり静岡と糸魚川を結ぶラインで、そこに日本の象徴・富士山があります。この2つの大陸プレートの下に太平洋プレートとフィリピン海プレートという2つの海洋プレートが潜り込んでいます。特に太平洋プレートは世界一速く年間10cmほど動いているため、そのプレートの上に乗っているハワイは毎年10cmずつ日本に近づいてきているわけです。

ハワイを乗せた太平洋プレートは、3.11以後は「アスペリティ」と呼ばれるプレートの滑り止めがなくなったので、さらに勢いよく年間30～40cmのスピードで日本列島の下に滑り込んでいるという科学者もいます。その分マグマも海洋プレートが沈み込んだ地下でどんどん形成され、日本の火山活動はより盛んになると解釈できます。

私たちが地理や歴史を学ぶ時、地図で伊豆大島や三宅島という不動の島のように教えられます。ところがこうしてリアル地球儀で見えていくと、プレートの動きがわかり、日本列島に海洋プレートが沈み込んでマグマが作られ、火山活動が活発になる様子が理解できます。つまり生きていく地球が実感できるのです。

このように地球観を新たなものにリセットすることで、大きな災害に対しても「未曾有」とか「想定外」という言葉を死語にしていくことができるでしょう。特に生きていく地球の胎動がもっとも局所的に凝縮されて現れるのが日本列島です。そこに生きる者としては、こういう新しい地球観は当然のリテラシーでなければなりません。

## 災いは恵みである

こういう話は、子どもたちをいたずらに怖がらせはしないかと心配なさる方もおられます。果たしてそうでしょうか。

「災いと恵み」というのは常に表裏一体です。火山活動や台風、洪水というものは、実は地球を自己再生させているのです。例えば台風は地球スケールのミキサーです。海をかき混ぜることで深いところにあるミネラルを上層に持ってきます。プランクトンでもクジラでもみんな死んだら海底に沈殿しますから、海底は墓場であると同時に有機物やミネラルなど栄養素の宝庫でもあります。深層流や深層水が豊かな栄養素を含むのはそのためです。しかし、一部の湧昇海域を除いては、深層の恩恵はなかなか表層にはもたらされません。

海の世界連鎖のベースとなる光合成プランクトンが大繁殖するためには、光の届く海の表層にしなければなりません。でも栄養素は深海にあります。その分裂を解消してくれる1つが台風なのです。台風の過ぎ去った後には被害もありますが、プランクトンが繁殖して魚が豊かになる。台風の来ない年は海がやせると漁師さんは言います。

火山もそうです。日本は火山帯であることで地震も噴火もありますが、火山のミネラルで土が肥えます。日本が肥沃な平野を有するのは、地震と火山、洪水の恵みといえます。

関東平野を見てみましょう。本来、造山帯で急峻な地形の日本列島にこのような広大な平野はないはずですが、ところが断層でできたくぼみなどに、洪水が火山から噴き出した肥沃な土砂を運び、それが少しずつ川下に運ばれ沖積平野ができたのです。

当然、災害に弱い土地でしたが、徳川家康は日本の中心を京都から片田舎の日比谷漁村に移しました。そして、東京湾に流れ込んでいた利根川の流れを銚子方面に変えることで、江戸を洪水から守ったのです。こうして関東平野の肥沃さ、豊かさを上手く活かし100年ほどでGDP（コメの生産高）を倍増させ人口も急増しました。このように災いはマネージさえすれば豊かな恵みを享受できるのです。

また日本の水田や棚田は生物多様性の宝庫です。これらは人が手を入れた自然ですね。急峻で洪水ばかり起こしているところでは、カエルだって卵を産んでもすぐに流されてしまいますが、穏やかな流れならゆっくりと繁殖できるわけです。日本はこのように自然をマネージすることで豊かな国土や景観をつくってきました。

いま箱根の火山活動が活発になっています。これも短期的に見れば温泉業や観光業にとって打撃です。首都圏でもマネージしなければならない課

題ですけど、中長期的にみれば私たちの豊かな経済の基礎はこうした生きた地球がもたらしてくれたものです。その上で災いと恵みの両面を見ながらマネージしていかなければなりません。

## 人間活動と地球

これまでご覧にいられたのは地震活動や気象現象といった自然現象になります。もう一つ、現在や将来の地球を考えるのに不可欠な要素があります。それは人間活動です。

人間活動にもいろいろな要素があります。この地球儀では、大都市が増殖していく様子や世界の海を航行する船のリアルタイムの動きも見られます。直接的な活動ばかりではなく、人間活動がもたらした影響も見られます。例えば大気汚染物質が移動する様子です。その中から pm2.5 の成分でもある硫酸酸化物の流れを見てみましょう。

大気汚染物質とか pm2.5 という、私たちは日本の天気予報の感覚で、中国から飛んできているように思いがちです。ところがこの地球儀を使って北極を中心にして見てみると、どこで発生した汚染物質が世界中を回っているのかが見えてきます。決して中国ばかりではありません。東欧やロシアからユーラシア大陸を股にかけて硫酸酸化物が日本に流れてきているのが見えてきます。こういうことは、自国だけを見てはわからないことです。地球規模で捉えないと本当の姿は見えてきません。

そういう意味では、大気汚染以上に地球規模のリスクを考えなければならないものに CO<sub>2</sub> の問題があります。現在の CO<sub>2</sub> 排出量は人類全体で 1 日 1 億 t、その濃度は 400ppm を超えつつあります。産業革命前と比べて 4 割ほど増えてきています。結果として、当然いろいろな問題が出てきていますが、まず地球温暖化に触れます。

今の化石燃料に依存した経済活動を 2100 年まで続けていくとどんな未来になるのか、そのシミュレーションをデジタル地球儀でご覧ください(写真 2)。20 世紀初頭と比較して、気温が 3℃上がったところが赤、その倍の 6℃上がったところが黄色で表わされています。さらに 9℃上昇したところは白くなっています。これをみるとユーラシア大陸の北側が 6℃の上昇で黄色く、北極圏は 9℃の上昇で白くなっています。同様にヒマラヤ、チベットも高い気温上昇を示しています。これは専門的には「アルベド効果」と言い、白い氷に被われているところほど太

陽光は多く反射され吸収される熱は少なくなります。ところが氷が縮小するとこのアルベド効果がなくなり、多くの太陽光を吸収することになります。このため温暖化は加速していくというわけです。

極地やヒマラヤには、あまり人が住んでないのでマイナーな話だと思われるかもしれませんが、この影響は私たちにも決して遠い話ではありません。北極圏のグリーンランドの氷床が融けることで、まず世界中の海面の上昇が考えられます。また、ヒマラヤの氷河が失われることで、ここを源流とする大河、例えば黄河や揚子江、メコン川やガンジス川などが枯渇するでしょう。実際すでに黄河などは過去 20 年ほど水量が激減し、河口まで水が流れない「断流」現象が発生しています。この水に依存して作物を育て、生活している中国やインド、東南アジアの人口は 25 億～30 億人といわれます。この人たちが影響を受けることになります。もしこれだけの人口が食糧を賄えなくなると、世界的な食糧危機に陥るでしょう。

さらには戦争や難民発生の引き金となります。例えばシリアの内戦とイスラム国台頭の引き金を引いたのは干ばつです。2007 年から 2010 年にかけて、4 年連続の干ばつが中東地域全体を襲っています。この原因は、北極の温暖化で低緯度地域との温度差が緩和され、高緯度地域と低緯度(亜熱帯)地域のあいだの熱交換メカニズムとしてのジェット気流に変調をきたしたため、その影響で中東の干ばつが長期化しています。このように北極の温暖化が、人口や穀倉地帯の多い中緯度地域の深刻な気候変動をもたらすわけで、北極も決して「遠い

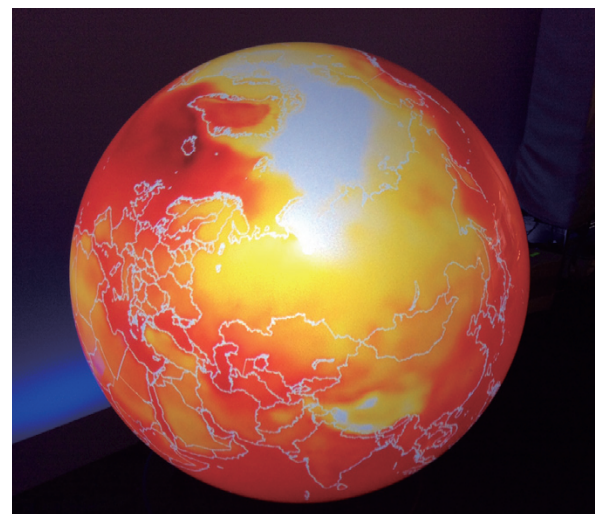


写真 2 現在の経済活動のまま温暖化が進んだ場合の気温変化のシミュレーション(2100 年)。赤が 3℃上昇、黄が 6℃上昇、白が 9℃上昇。

世界」ではないのです。地球規模で捉えることで、こうした因果関係もはっきり見えてきます。

## 希望をもつために

では、進む温暖化を前にして私たちにはもう希望はないのか。RCP2.6と呼ばれる、もう1つの気候変動予測のシナリオを見ますと、もしもCO<sub>2</sub>排出量を2050年までに半減し、2080年くらいにゼロに近づけたなら、先ほどご覧いただいた2100年時点のユーラシア大陸北部の白熱したように温度上昇していたところも、ほとんどが3℃程度の上昇で抑えられるということが見てとれます。これは、あくまでもシミュレーションですから、この通りになるとは限りませんが、少なくとも私たちの選択で未来は大きく変えられる可能性はあるということを示唆しています。

いま全人口75億の半分が都市で暮らしていますが、いまから15年後の2030年時点の都市インフラの6割は、これから作られるという統計もあります。半分以上がこれから作られるのですから、まだ方策はあります。これから建てるビルを災害にも強く、エコフレンドリーなものにしていくことで、地球環境も大きく変えていけるわけです。

最後に最近流行りのAR技術(オグメンテッド・リアリティ 拡張現実)で地球をご覧いただきましょう。地球儀を肉眼でみると何もないけれど、専用アプリの入った携帯端末ごしに見ると地球儀上に世界遺産が表示できます。あるいはオーロラのような上空100km、500kmの現象もAR技術を使えば、地球儀上の空間に浮かんでいるように見えます。

この技術を使って世界中の風力発電を見てみましょう(写真3)。さすがにヨーロッパにはたくさんの風車があります。でも地球儀を回してみると中国にも多くあるのがわかります。この風車1本が原発10基分の発電容量を示していますので、ざっと数えると原発60数基分の風力発電になります。

実は中国では2010年度に風力による発電量が原子力発電量を抜いています。世界一のCO<sub>2</sub>排出国である中国が、すでに世界一の風力発電大国でもあり、石油にも原発にも頼らない時代に先駆けて再生エネルギーを進めているのです。世界はものすごい勢いで変わっているのです。

こうした中で私は有機太陽電池やカーボンナノチューブなどの「新炭素技術」に大変期待しています。今まで悪者としてきたCO<sub>2</sub>を回収して、そ



写真3 AR技術で見た中国の風力発電の様子。風車1本の発電容量が原発10基分に相当。

れをできるだけ付加価値の高いものに加工していく産業が地球の未来を開くと思っています。そうした観点で地球の未来ビジョンをまとめた『新炭素革命』という本を最近PHP社から出版しました。

いずれにしても地球のリアルに触れながら、地球の未来や希望のシナリオを語れる場が、現在のIT技術と最先端の科学データを駆使すればできるのです。日本の子どもたちに、この時代に生まれたのはなんとエキサイティングなことだと感じ取ってもらえるような教育環境を、このデジタル地球儀で用意したいものです。

### 竹村 真一 (たけむら しんいち)

京都造形芸術大学教授・Earth Literacy Program 代表  
1959年生まれ。東京大学大学院文化人類学博士課程修了。地球時代の新たな「人間学」を提起しつつ、ITを駆使した地球環境問題への独自の取組みを進める。世界初のデジタル地球儀「触れる地球」(05年グッドデザイン賞・金賞、中型普及版は2013年キッズデザイン最優秀賞・内閣総理大臣賞を受賞)や「100万人のキャンデルナイト」、「Water」展(07年)、コメ展(14年)などを企画・制作。2014年2月、丸の内に「触れる地球ミュージアム」を開設。環境セミナー「地球大学」も丸の内で主宰。Jwaveのナビゲーターもつとめる。東日本大震災後、政府の「復興構想会議」検討部会専門委員に就任。また国連UNISDR(国連防災機構)より「国連防災白書2013」のコンセプトデザイン・ディレクターに指名される。

触れる地球の体験をご希望の方は下記まで。

#### 「触れる地球ミュージアム」

東京都千代田区大手町2-6-2

日本ビル6階662区「3x3Labo内」

開館日 月～金曜 午前11時～午後7時

電話 03-6262-1942

HP <http://earth-museum.jp/>

# ファッションで途上国支援する「フェアトレード」

ファッションジャーナリスト 生駒 芳子 氏

## 資本主義の未来が問われる今

フェアトレードを論ずる前に、まずはこんなことを考えてみたい。20世紀の歴史を押し進めてきた“資本主義”が今その是非を問われている。株主や管理職だけが儲かり、金融が暴走するシステム——ひいては、ふくれあがる貧困層と資産を増やし続ける富裕層という社会の極端な二極化を生む装置として、いまやその先行きが危ぶまれている。

そこで、さまざまな新しい形での資本主義が、唱えられ始めている。まずは「公益資本主義」。社員の給料をカットしたりリストラしたことで収益をあげた経営陣が、その経営の手腕を評価され、多額のボーナスを支払われるといった管理職や株主だけに利益が充当される従来型の資本主義を改め、地域社会や従業員をはじめとするあらゆるステークホルダーに対する利益の還元を重視し、持続可能でより公平な経済発展を目指している。それは、かつての近江商人の「売り手よし」「買い手よし」「世間よし」という「三方よし」といった考え方に近い。

「公益資本主義」の提唱者は、実業家や考古学者、ベンチャーキャピタリスといった多彩な顔をもつ原文丈人氏だ。「『会社は株主のもの』という考え方が、企業から新しい産業を生み出す活力を奪うのです。良い製品を作ることや将来のことよりも、『今』の時価総額を上げることが優先される考え方だからです」(BigLife21 2014年12月号「原文丈人氏・特別インタビュー」より)

企業の在り方を問う考え方に加えて、地方のパワー＝里山のパワーで、新たな経済のしくみを成り立たせようという「里山資本主義」という考え方も出てきている。地域エコノミストの藻谷浩介さんや、哲学者の内山節さんが唱える、地域の資源を活用する経済のしくみを創造しようという発想だ。藻谷さんは「里山には、代々の先祖が営々と育ててきた、自然と共に生きるシステムがあり

ます。そのルールを守っていると、いまの時代でも、水と食料と燃料、それに幾ばくかの現金収入がちゃんと手に入ります。新鮮な野菜に魚、おいしい水、火を囲む楽しい集まり、そして地域の強いきずな。

都会であくせくサラリーマンをやっている人間よりも、里山暮らしの人間の方がお金はないけど、はるかに豊かな生活を送っているということ、私は各地で実感しています」と述べる。(NHK ECO CHANNEL 特集「里山のチカラ」より)

## ファッションで、途上国の貧困層をサポートできるか？

いずれにせよ旧来型の資本主義には、この地球を未来に率いていく力は見出せない——というわけで、人類全体が急速な勢いで経済の新たな在り方を模索し始めているのが現状だが、当面、二極化した世界の中で気がかりなのは、途上国の貧困の現状だ。

21世紀になって登場した新たなファッションの道筋である「エシカル・ファッション」のいくつかの柱の一つに、「フェアトレード」がある。食品の領域では着々と広まりつつあるフェアトレードだが、ファッションの領域でも2000年を越えてから注目が高まっている。社会の課題を解決するファッションの力を感じさせる新潮流だ。

フェアトレード (fair trade) とは、直訳すれば「公平な貿易」。古くは植民地支配時代の取引において、そして現在でもグローバルな国際貿易の仕組みは、経済的にも社会的にも弱い立場の開発途上国の人々にとって、しばしば「アンフェア」で貧困を拡大させるものだという問題意識があり、南北の経済格差を解消する「オルタナティブトレード：もう一つの貿易の形」として、約60年前からアメリカやイギリスでフェアトレード運動が始まった。

フェアトレードとは、開発途上国の原料や製品



を適正な価格で継続的に購入することにより、立場の弱い開発途上国の生産者や労働者の生活改善と自立を目指す新しい「貿易のしくみ」を指す。対話、透明性、敬意を基盤とし、より公平な条件下で国際貿易を行うことを目指す貿易パートナーシップだから、弱い立場にある生産者や労働者に対し、より良い貿易条件を提供し、かつ彼らの権利を守ることにより、フェアトレードは持続可能な発展に貢献している。

こうしたフェアトレードの考え方をいち早くファッションに取り入れ、ブランドとして確立して活動し、人気を得ているのが、世界的パイオニア「ピープル・ツリー」だ。

ちなみに、フェアトレードの10の指針を、ピープル・ツリーはこう定義している。(Fair Trade & Ecology PEOPLE TREE ファッション通販サイトより)

1. 生産者に仕事の機会を提供する
2. 事業の透明性を保つ
3. 公正な取引を実践する
4. 生産者に公正な対価を支払う
5. 児童労働および強制労働を排除する
6. 差別をせず、男女平等と結社の自由を守る
7. 安全で健康的な労働条件を守る
8. 生産者のキャパシティ・ビルディングを支援する
9. フェアトレードを推進する
10. 環境に配慮する

自然も、地球も、人々も、社会にも配慮する、つまり自然保護と人権保護の両輪がフェアトレードの背骨なのだ。

まさにフェアトレードファッションのリーダーである「ピープル・ツリー」は、英国人のサフィア・ミニーさんが1995年に日本で設立したブランドだ。

かつての印象では、フェアトレード商品は、地味で質素、まじめな手作り商品ではあるが、おしゃれのセンスには欠けている——というわけで、社会貢献やボランティア、チャリティなどに興味のあるごく一部の人々からしか指示を得ることができず、マーケットの中ではマイナーな存在だったわけだが、その流れを「ピープル・ツリー」が大きく変えた。

そのシフトの担い手であるサフィア・ミニーさんが先頭をきって試みたことが、注目される

ファッション・デザイナーとのコラボレーションだ。オーラ・カイリー、ボラ・アクスといったロンドンの先端的デザイナーに始まり、チサト・ツモリ、ミハラヤスヒロなど東京のトップ・デザイナーから、伝説のデザイナー、ザンドラ・ローズとも展開、さらには映画「ハリー・ポッター」の女優として知られ、トップ・モデルでもあるエマ・ワトソンとも組んで、若者向けのスペシャル・コレクションを展開している。実際、自由が丘にある本店を訪ねると、店内はおしゃれなセレクトショップという印象で、ファッションナブルな若い女性たちが多く訪れている。

サフィア・ミニーさんに会うと、彼女自身が感度の高いファッションistaであり、また、フェアトレードへの情熱、使命感に満ちた人生を歩んでいるパワーを感じさせる。

しかし、フェアトレード・ビジネスが容易ではないことも、サフィアさんの活動を通して感じている。アジア、アフリカ、南米の12ヵ国、約140団体と共に、オーガニックコットンをはじめとする衣料品やアクセサリ、食品、雑貨など、できるだけその地方でとれる自然素材を用いた手仕事による商品を企画開発・販売している「ピープル・ツリー」だが、これらの生産者を次々訪問し、ときには、彼らのために工場や託児所を建設したり、細かく生産の指導をするなど、都会のマーケットで機能するクオリティの高い商品を生産することが、いかに大変なことか。生産者にしっかり前払いし、施設に投資すると同時に、都会のマーケットの中での価格を押さえるという試みは、当然、利益を簡単に生みにくいわけだから、プロデューサーする人々の情熱が錬金術的にこのシステムを成り立たせているという背景は、忘れてはならない。

## フェアトレードの現場で感じたこと

そのサフィア・ミニーさんに誘われて、ネパールのフェアトレード商品の生産者の現場を訪ねたことがある。

ネパールでももっとも貧しいと言われる地域で、フェアトレードの事業を営むクムベシワール・テクニカル・スクールを訪ねた。1983年以来、ネパールの首都、カトマンズ郊外で立場の弱い人びとに職業訓練と雇用機会を提供し、つねに2,500

人の職人が仕事を得て、ピープル・ツリーの手編み、手刺繍のカーディガンやセーター、帽子、手袋やストールなどを生産している。その事業者が雇っている生産者の自宅を訪ねたのだが、6畳間に6人が暮らすような貧しい一室で、女性達がひまを見つけては、朝から晩までニット編みをしている風景に出会った。彼女たちの声を聞くと、「この仕事があることで、子どもたちを学校に通わせることができる。工場に行くのでは生活が壊れるが、自宅で仕事ができることが有り難い」とのことだ。これは彼女達の現実を表す声だ。途上国に工場を立てて、雇用創出することが社会貢献のように報じられているが、実際には、途上国の貧困層は、自宅で仕事をする中で、子育てや親の介護などを乗り越えることができる。それは現地を訪ねないと見えない現実だった。

また、サフィアさんが、現地の生産者を集めてニットのクオリティを上げるための厳しい指導をしている様子や、経費を節約しつつクリエイティブに仕上げるために、棚田の真ん中でサフィアさん自らがカメラを握り、「ピープル・ツリー」のカタログ撮影を楽しく行う現場にも立ち会った。取り組む人々の情熱がなければ、フェアトレードは成り立たないというのが現実だ。

ファッション・ブランドの生産の裏側が、いま次々と露呈している。90年代に、途上国の子どもに過酷な労働を強いていたスポーツブランドの現状が明るみに出て、ファッション界に衝撃が走ったが、それはいまでも続いている。最近でも低価格を売りとする著名なブランドが中国で、高温、化学物質の汚染、長時間労働といった最悪の労働条件が下請け工場に見られたという報道がなされている。2013年には、バングラデシュの縫



クムベシュワール・テクニカル・スクール（ネパール）のニット編み

製工場が自然崩落し、1,000人以上の縫製労働者が死亡するという事件が起きた。そのことをきっかけにして最近完成された映画「The True Cost」では、安価な商品の陰に、途上国での劣悪な労働環境での生産が隠れているという事実がショッキングに描かれている。

こうした現状に触れるにつけ、フェアトレードやエシカルファッションがいかに貴重で大切であるかを感じるのだ。

「ピープル・ツリー」以外にも、白木夏子さんが発信するエシカルスピリットを宿したジュエリーブランド「HASUNA」や、プロデューサーの高津玉枝さんが世界中からおしゃれなフェアトレード商品を集めるセレクトショップ「LOVE&SENSE」、フェアトレードでもセクシーに、という思いから始まったロンドン発の「INHEELS」など、途上国を支援するおしゃれなファッションブランドやショップは、いま、次々とマーケットの中で話題になっている。

### フェアトレードが開く未来とは

21世紀のスピリットは、関わる人々が皆幸せになるWin-Winのシステム、犠牲のない豊かさや美しさこそが、これからの人類の美意識だ。フェアトレードの商品を買うということは、すなわち「思いやり」の消費だ。自分の欲望を満たすだけの時代は終わって、自分の欲望と同時に、地球上の困っている人々を助けることができる、そんな母性溢れる消費がこれからの地球を支えていく。このスピリットにもっとも敏感に反応しているのは、10代、20代の若者たちだ。バブル期を経て、経済成長だけが人類を幸せに導くと信じてきた団塊の世代にとって、フェアトレードは一つの踏み絵かもしれない。それを理解して次世代の感性に飛び込むか、踏みとどまるか。フェアトレードの商品は新しい価値観を気づかせてくれるものでもあるのだ。

毎日のおしゃれや買い物を楽しみながら、途上国の困っている人々＝貧困層の経済自立を支援できる——そんな地球市民的な発想で、毎日の買い物やおしゃれを楽しめる日は、もうすぐそこにきている。

立教大学大学院 21世紀社会デザイン研究科 教授 萩原 なつ子氏

この4月、仕事でシンガポールに行った際に、動物園好きや動物園関係者ならば一度は行きたい究極の動物園「シンガポール動物園」を訪れた。この動物園は28haもある植林地帯を切り開いて建設され、1973年に開園した。現在は絶滅危惧種を含む300種以上、約3,000頭近くの動物が展示されている。年間140万人以上が訪れるシンガポール有数の観光スポットの一つとなっていて、リピーターも多い。何を隠そう、実は私も今回が3度目の訪問である。毎回新しい発見と出会いがある。

シンガポール動物園が「究極の動物園」といわれるその理由は、基本的なコンセプトである「OPEN ZOO オープンズー」（無柵放養式展示）や動物の生態環境から行動までを展示する方法にある。オープンズーというのは、動物園によくある大がかりな太い鉄柵やコンクリート壁の代わりに、水堀や空堀、微弱電流が通る電柵を組み合わせ、動物を囲う方法で、動物が逃げ出さないようにする障壁を観客から見えないようにした「開かれた展示」のことである。シンガポール動物園はこのような展示方法の先駆者であり、お手本として世界中の動物園に多大な影響を与えている。当然のことながらシンガポール動物園は教育にも熱心に取り組んでいて、動物園教育の分野でも最先端を走っている。

緑豊かな園内には、植林地帯にもともと生息していた動物や、他の動物がいたるところに放し飼



「にらめっこするかい?！」

い状態で展示されている。動物と観客との間の壁がないので、動物との距離がとて近く感じられる。入園してすぐにその展示の醍醐味を味わうことになる。手の届くところに猿の一種のタマリンが樹木をちょろちょろ動き回っていて、私たちが動物を観るといよりは、彼らに私たちが見られているという不思議な感覚を体感することになる。

歩き進むにしたがって色々な種類の猿たちが木から木へと飛び移ったり、餌を食べたり、じゃれあったりする姿が見られる。まるでジャングルの中に迷い込んだかのような錯覚に陥る。圧巻は、世界最大のオランウータンの群れである。水堀で囲われた大きな島に作られたジャングルジムで遊ぶ姿や、園内の樹木に張られたロープにぶら下がったり、自由自在に綱渡りをしたりする姿が間近に見られる。どちらかと言えば、檻の中でジッと座っているというイメージが強いオランウータンの姿からは想像もつかないほど活発に動き回る姿に感動する。

水堀を優雅に泳ぐホワイタイガー、河川環境を再現したプールで泳ぐコビトカバの愛らしい姿等々、園内いたるところで、シンガポール動物園が目指す、動物の普段の行動をできるだけ“ありのままに”展示する技法を実感することができる。人気の餌やりタイムは、茂みに隠れていた動物たちが“待ってました!”とばかり姿を見せてくれる。

出口に向かって歩いていると飼育員が木の上にいる一匹の中型のサルに向かって話しかけている。どうやら本来の展示場の電流柵を越えてしまったらしい。オープンズーならではのハプニング。飼育員は網で捕獲することなく、優しく声をかけ続けている。その様子を見ていて思った。動物とヒトのより良い関係づくりには対話がカギであること。そして、動物園は、私たちが日頃忘れがちな自然環境や動物へのまなざしを呼び覚まし、ヒトが動物であることを見つめなおす場でもあるということ。

# 「優しい」だけでは 続けられない

ダイセン株式会社 記者 富永 周也氏

近ごろ気になるニュースは「エコキャップ運動」です。ご存知のようにペットボトルのキャップを集めてリサイクルし、その利益で途上国にワクチンを贈る活動で、企業、自治体、学校などが参画する国民的キャンペーンとなっていました。しかし、4月10日付の朝日新聞はエコキャップ運動の事業体であるNPO法人「エコキャップ推進協会」が「2013年9月以降、キャップの売却益があるにもかかわらずワクチン代に寄付していない」と報道、波紋を広げています。同協会は「障がい者の雇用創出・自立支援を優先的に選択した」として「説明不足」を謝罪しましたが、まだ紛糾しそうです。

個人的には「やはり…」と思う点もありました。回収した後のキャップはどうなるか。集積場に運び、シールなどを剥がして洗浄し、素材別にえり分け、粉碎して原料に戻すというプロセスが必要です。このコストが「売却益に見合わない」と以前から指摘されてきました。しかし、自分も含め、多くの人はキャップを分別して回収に出して、おしまいになっていなかったでしょうか。

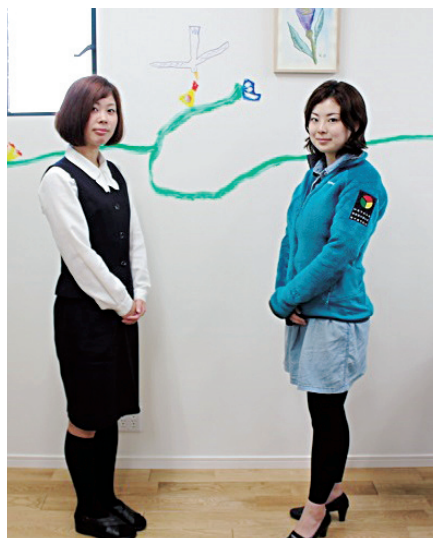
廃棄処分しかないものをリサイクルすることに異論はないはずですが、それが経済活動のなかで持続していくためにはコストが不可欠です。にもかかわらず、この部分は一般消費者に曖昧にされてきました。今でも見聞きする「地球環境に優しい」という抽象的な言葉に、その一端が表れている気がします。善意だけで環境保全が成立するには、社会の構造は複雑になり過ぎてしまいました。実態から乖離した「優しい」だけのエコロジー活動に未来はあるのでしょうか。

ここで、ユニフォームが意識づけに一役買っている例を紹介します。大阪府東大阪市の産業廃棄物リサイクル企業・三洋商事は「地球にありがとうを伝える企業」を経営理念に、積極的な環境保全活動を展開しています。今年1月、アウトドアウェア「パタゴニア」のウィンドブレーカーとフリースをユニフォームとして採用しました。パタ

ゴニアは再生素材の採用を積極的に推進しているメーカーとして知られています。三洋商事はこれまで大手SPAのウェアをユニフォームにしており、使い捨てが基本でした。しかし、修理して長年使うパタゴニアのコンセプトと企業理念がマッチするとして、切り替えに踏み切ったといいます。「ユニフォームの切り替えでコストは割高になるが、長く使えるので十分見合う」という判断です。「小口のメンテナンスに対応でき、長持ち」「透明性の高い生産工程」も評価のポイントでした。

同社は産廃を手で分解することで再資源化率97%という高い数字を維持しており、丁寧な手作業を信条とするパタゴニアの姿勢と共通点が多いように感じます。着て働くことで、スタッフの意識もさらに高まっていくでしょう。

ユニフォームのリサイクルにも多くの手間とコストがかかっています。しかし、毎日着用し、人目に触れるメッセージツールとしてのポテンシャルも持っています。「着られなくなったらどうなるのか？」という単純な疑問をきっかけに、正しいリサイクルへのナビとして機能を発揮できれば、ユニフォームの意義はさらに高まるはずです。



「パタゴニア」のフリース(右)をユニフォームとして採用した三洋商事(「月刊ユニフォームプラス」2015年6月号より)

# 平成26年度リサイクルマーク事業 ユニフォームリサイクルシステム実施状況

本機構は、環境保全に配慮したユニフォームのリサイクルシステム提供事業（リサイクルマーク事業）を実施しています。「ユニフォームリサイクルシステム」は、環境保全に配慮しているユニフォームにリサイクルマークを縫着し、製造から販売、供用、そして使用済みとなり適正に再生利用されるまでユニフォームの生涯管理を行うことで、廃棄物の減量や有害物質の発生削減を目指すシステムです。

平成26年度の事業実施状況は下記のとおりです。

## 1. リサイクルマーク交付状況

リサイクルマーク交付枚数は43万3,145枚、交付件数は800件でした。内訳は、マテリアルリサイクルマークが37万7,542枚（436件）、ケミカルリサイクルマークが5万5,603枚（364件）です。（図1～4参照）

図1 リサイクルマークの種類

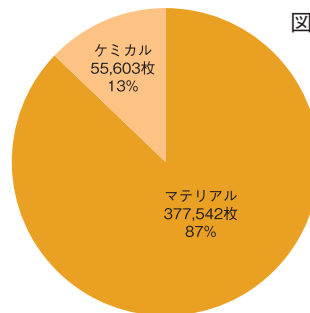


図2 服種

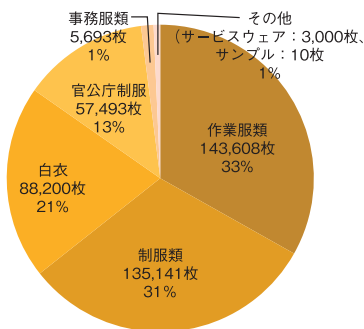


図3 平均着用期間

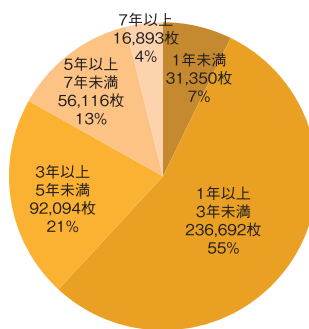
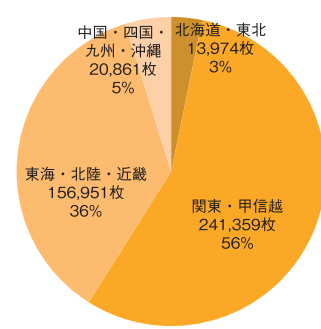


図4 地域別ユーザー分布状況



## 2. 使用済みユニフォームの回収状況

使用済みユニフォームの回収点数は11万8,245点、回収件数は261件でした。内訳は、マテリアルリサイクルマーク付ユニフォームが11万478点（250件）であり、ケミカルリサイクルマーク付ユニフォームが7,767点（11件）です。（図5、6参照）

## 3. 使用済みユニフォームのリサイクル処理状況

リサイクルマーク付使用済みユニフォームの処理は12万2,091点（約64.4t）でした。内訳は、マテリアルリサイクル処理が11万478点（約56.9t）、うち自動車内装材に8万3,667点（約48.9t）、屋根下防水材に2万6,811点（約8t）再生されました。ケミカルリサイクル処理は1万1,613点（約7.5t）、全てもとの原料に還元されました。（図7参照）

図5 使用済みユニフォームの縫着マーク別回収状況

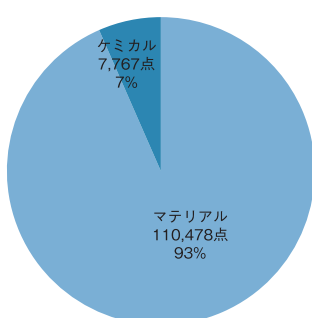


図6 地域別回収先分布状況

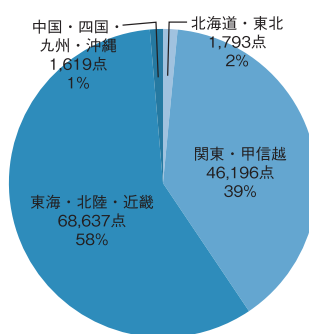
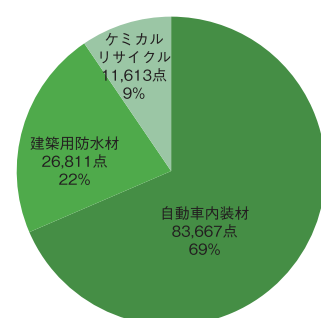


図7 使用済みユニフォーム再生状況



# 八王子市高尾周辺地域住民による 循環型地域づくりのための人材育成事業

## 1. 活動の目的・概要

本機構は、大量生産・大量消費・大量廃棄の生活様式を循環型地域へ転換することを目的に、平成24年度から3カ年かけて循環型地域づくりのための人材育成事業を実施しました。

本事業は、地域住民が循環型社会実現の担い手となる次世代の子どもたちを対象に自然を活用した環境教育を実践することで、循環型地域づくりのために自発的に取り組める人材を育成し、さらに、こうした人材が他地域で活動できるようなプログラムを策定するものです。

なお、本事業は（独）環境再生保全機構の地球環境基金の助成により実施しました。

## 2. 平成24年度活動概要

里山をフィールドとした効果的な環境教育プログラムを実施するため、各地の好事例について各団体の活動状況、地域との関係構築方法、企業との連携方法、教育プログラム実施方法の独自性等のヒアリング調査を実施しました。

- ・日本山岳会－高尾森づくりの会（東京都高尾地区）
- ・NPO森林・環境ネットワーク（京都府南丹市）
- ・特定非営利活動法人やまんばの会（滋賀県米原市）
- ・山村塾（福岡県八女市）

この検証結果をもとに、八王子市の里山をフィールドとした循環型地域づくり環境教育プログラムを策定しました。

プログラムの内容は、森林整備を行いつつ、その整備に関連して森の遊びが楽しめるようにすると同時に、日々の生活の「衣・食・住」を意識させることで、森林と私たちの暮らしに「繋がり」があることを自然と認識できるようにするものです。

## 3. 平成25年度活動概要

東京都八王子市の裏高尾をフィールドとして、策定したプログラムを活用したモデル事業を右表のとおり4回実施しました。

### 平成25年度モデル事業概要

新宿区西新宿小学校	
日程	平成25年4月23日
対象者	小学校5～6年生65人
活動内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人工林の間伐体験</li> <li>・木材の活用についての学習</li> <li>・整備の有無による里山の違いの比較体験</li> <li>・人工林と広葉樹林の違いの比較体験</li> <li>・焚火体験（自分で火をおこしてみる）</li> </ul>
エコギャラリー新宿	
日程	平成25年7月13日
対象者	小学校2～6年生・保護者30人
活動内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・森遊び・沢や山の生き物探しの活動</li> <li>・焚火体験・木のペンダント作り</li> </ul>
NPO法人ワンダートンネル	
日程	平成25年8月4日
対象者	子ども・保護者20名
活動内容	シェルター作り（森にあるものを使った造形教育として）
アクセンチュア	
日程	平成25年11月23日
対象者	子ども・保護者26名
活動内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・下草刈り等の軽労働体験</li> <li>・木のペンダント作り</li> </ul>

モデル事業の実施にあたっては、有識者を招いた意見交換会を開催し、実際の現場におけるプログラム利用について、子どもたちに接する際の心構えや緊急時の対応等をより具体的に検討しました。そのプログラムに基づいて実施したモデル事業を通じて判明した課題について再度意見交換会を開催しました。



地元住民による間伐体験



焚き火でマシュマロ焼き

また、モデル事業の実施を通じてプログラムを  
実践できる地域リーダーの育成に取り組みました。

#### 4. 平成 26 年度活動概要

モデル事業の実施成果をもとに ESD 環境教育  
プログラムを改訂し、地域リーダーを育成しました。

また、モデル事業に引き続き、学校や団体への  
誘致活動を行い、教育関係機関を受け入れた体験  
活動やワークショップ等を開催しました。

さらに、本事業を紹介するホームページ「高尾  
100 年の森～循環型地域づくりの人材育成事業～」  
の公開や、外部イベントへの参加により本事業の  
成果を広く一般へ普及しました。

##### ■ 地域リーダー育成

本事業では、対象地域である高尾において、モ

デル事業や継続的に月 2 回程度行っている里山の  
整備等を通じ、地域住民の自発的な活動の支援並  
びに循環型地域づくりのために自発的に取り組め  
る人材の育成を行いました。

その結果、体験活動を主導することができるよ  
うになり、今後はより積極的にイベントの企画運  
営などへ参画し、また講師派遣など他地域での活  
躍が期待される地域リーダーが育成されました。

インタープリターとしての能力は、場数を踏み  
経験を重ねることの他に、個々人の潜在的能力に  
帰属する面が大きく、対象者の適性を的確に引き  
出すため、今後はより多角的な視点、多彩な活動  
の充実を図りつつ、育成者としてのノウハウの蓄  
積を図りたいと考えます。

##### ■ ESD 環境教育プログラム策定

初年度に策定したプログラムから、さらに地域  
リーダーの資質として必要となる思考力や問題解  
決能力といった人間性の育成に言及した汎用性  
のある内容に改訂し、下記の 4 つのプログラムを策  
定しました。

なお、プログラム 4「間伐材を活用して『My 箸』  
を作ろう」は、環境省の「持続可能な地域づくり  
を担う人材育成事業に係る ESD の視点を取り入  
れた環境教育プログラム」に応募し、採用されま  
した。

##### プログラム 1

##### 森林プログラム

—この里山にはどんな動植物が生活しているかな？

里山に棲む動植物をとおして、地球環境におい  
て木が果たしている役割や、動植物が共生する仕  
組みを学ぶ。また、里山の動植物について調べた  
ことを地域住民に発信することで、地域環境に興  
味を持ち、地域の自然を守ることの大切さや難しさ、  
小さくても自分にできることがあることを知り、自  
然と人間が共に生きることを考える。



##### プログラム 2

##### 里山の草木を活用して布を染めてみよう

八王子市はもともと養蚕や織物で栄えた歴史を  
持つ。今も継承されている伝統的産業について、  
里山で実際に布を染めるという経験を通じ、人が  
なぜ布を織り、染め、身につけるといった行為をす  
るのか、自ら主体的に考え、調べることを通じて里山  
の魅力を理解するとともに、環境にやさしい産業の  
創造行動に結びつけていく。



### プログラム3

#### 里山から食を考えよう

木の実やキノコ、山菜、獣肉、さらに人々が食の煮炊きに利用する薪や炭などを生み出す里山は食の原点であり、管理された里山は保水性も高く、地中の養分を十分に含んだ湧き水は、人々の生活を支え、また山から川へ、川から海へと豊かな養分を運び、生き物を育ててきた。

里山をとおして、このような食の連鎖について学び、現在の食の在り方がグローバル化する中で、貧困や紛争につながっているという問題意識の発見のきっかけに結びつけていく。



### プログラム4

#### 間伐材を活用して「My箸」を作ろう

箸や椀、ざる、お櫃をはじめとした食具、さらに住の基本たる家屋など、日本人は里山から産出した木竹製品に頼って生活してきた。現在では安価な既製品が手に入り、里山の資源を利活用することもなくなりつつある。人の手を離れて適正な管理がされなくなった里山は荒廃し、地域の貴重な財産の保全が危機に瀕している。

こうした諸問題について、間伐材からの「My箸」作りというプリミティブな作業により、地域の環境問題、ひいては地球環境規模の問題意識まで掘り下げる端緒とする。



※本事業の詳細な内容にご興味のある方は事務局までお問い合わせください。

## 事務局だより



### 平成 27 年度

#### 循環型社会形成推進功労者表彰受賞者決定

6月24日開催の本機構理事会にて、平成27年度循環型社会形成推進功労者表彰受賞者が下記のとおり決定しました。

- ・鹿島建設株式会社
- ・ファイバーリサイクルネットワーク
- ・株式会社ベネフレックス

ご応募いただいた皆様、ありがとうございました。

表彰式は、下記のとおり開催します。8月上旬に詳細を本機構ホームページに掲載しますので、皆様お誘い合わせのうえ、ぜひご来場ください。

【日程】9月2日(水) 15:00～17:00

【場所】KKRホテル東京(東京都千代田区大手町)

### 「第19回環境文化講演会」開催報告

【日程】6月24日(水) 【場所】航空会館

#### 【内容】

##### 第一部 環境配慮繊維素材事例紹介

東レ株式会社繊維 GR・LI 推進室室長 佐々木 康次氏  
植物由来ポリエステル「エコディア」

一村産業株式会社エコフェイス事業部長 東 俊一氏  
環境配慮型分解ポリエステル繊維「エコフェイス」

##### 第二部 基調講演

京都造形芸術大学教授 竹村 真一氏

「『地球目線』で持続可能な未来を考える  
～『触れる地球』を使って～」

当日は多数の方にお越しいただき盛会に終えることができました。基調講演の様子は、巻頭記事をご覧ください。ご参加いただいた方々に心より御礼申し上げます。

## 季刊 エルコレーター vol.63

発行者：公益社団法人 環境生活文化機構 発行日：2015年7月24日 〒105-0003 東京都港区西新橋1丁目20番10号 サンライズ山西ビル6F  
TEL：03-5511-7331 FAX：03-5511-7336 <http://www.elco.or.jp> E-mail:elco.inc@trust.ocn.ne.jp